

隠喩と直喩，どちらが詩的か？

内海 彰

utsumi@se.uec.ac.jp

電気通信大学 電気通信学部 システム工学科

1 はじめに

修辞・文彩の代表的存在である比喩には、比喩であることを明示しない隠喩 (metaphor) と「～のようだ」等の語句を用いて比喩であることを明示する直喩 (simile) がある。例えば、「歴史は足跡である」は隠喩であるのに対し、「歴史は足跡のようである」は直喩である。今までの比喩研究において、比喩性を明示するかしないか以外に、これらの表現形式の間にどのような違いがあるかについては、ほとんど注目されてこなかった。その原因は、アリストテレスが「弁論術」(アリストテレス, 1992) の中で論じて以来広く信じられている「隠喩と直喩の表す意味は同じであるので、両者の違いはほんのわずかである」という信念にあると考えられる。

しかし近年になって、両者の違いに注目する研究が行われるようになり、いくつかの知見が得られている。例えば、何を何で喩えるかという被喩辞・喩辞の組み合わせに依存して、隠喩と直喩のどちらの形式が好まれるかが異なるという現象が観察されている (Chiappe & Kennedy, 2001; Utsumi & Kuwabara, 2005) (例えば、「人生は旅である」と「人生は旅のようである」はどちらが好ましい/適切な表現であるか考えてもらいたい。また、「高層ビルはキリンである」と「高層ビルはキリンのようである」ではどうであろうか。) その他にも、隠喩は直喩に比べて理解に必要な時間が短い (Glucksberg, 2003; Johnson, 1996) とか、より比喩的で強い表現である (Glucksberg, 2003; Zharikov & Gentner, 2002) ことが示されている。しかしながら、これらはどちらかという理解過程に関することであり、比喩の鑑賞 (appreciation) 過程に関して、隠喩と直喩でどのような違いがあるかは全くわかっていない。

比喩の鑑賞過程もしくは詩的効果の喚起過程を明らかにすることは、比喩研究全体にとっても重要である (楠見, 2005; Utsumi, 2005b)。しかし、比喩の鑑賞過程に関する研究も、理解過程に比べてほとんど行われていない。筆者 (Utsumi, 2002; 内海, 2004) は、言語表現の技法・解釈・効果の三者間の相互関係を人間 (受け手) の認知過程のレベルで説明する統合的理論の構築を目指す認知修辞学 (cognitive rhetoric) を提唱して、特に隠喩の審美的効果や詩的効果を含む情動喚起のメカニズムの解明を進めており、比喩の鑑賞過程について一定の

成果が出始めている (Utsumi, 2005b)。認知修辞学の観点からも、隠喩と直喩という意味が似ていて形式が異なる表現の詩的効果 (またはその喚起過程) の違いを調べることは興味深いテーマである。

そこで本研究では、隠喩と直喩で詩的度の認知に差が生じるかどうかを実験的に明らかにするとともに、隠喩の鑑賞過程に関する既存の知見や認知修辞学の枠組から得られる隠喩・直喩間の詩的度の違いに関する予測とどのくらい一致するかを検討する。さらに、比喩の理解過程と鑑賞過程の関係について考察する。

2 隠喩と直喩の間の詩的度認知の違いの予測

2.1 隠喩や直喩に関する経験的知見や理論的枠組

Utsumi (2005b) は、以下の3要因が隠喩の詩的度に影響を与えることを心理実験を通じて示した。

1. 解釈多様性 (interpretive diversity) — 隠喩解釈の豊かさを示す指標で、解釈を構成する個々の意味 (特徴や関係) の個数とそれらの意味の顕現度の一樣性に依存する。一般的に、意味特徴の個数が多いほど、またそれらの顕現度の高さが一樣であるほど、解釈多様性が高くなる。隠喩の詩的度は、解釈多様性と正の相関がある (解釈が多様なほど、その隠喩の詩的度が高い)。
2. 概念的適切性 (conceptual aptness) — 隠喩の適切さや理解の容易さを表す要因であり、隠喩の詩的度と負の相関がある (適切でない、または理解が困難である隠喩ほど、詩的度が高くなる)。
3. 感情価 (emotive value) — 隠喩の美的価値 (美しさや味わい深さ) を表す指標であり、隠喩の詩的度と正の相関がある (感情価の高い、つまり美しい隠喩ほど、詩的度が高くなる)。

さらに、理解容易な隠喩では解釈多様性と概念的適切性が詩的度に影響を及ぼす (つまり感情価は影響しない) のに対し、理解困難な隠喩では感情価のみが詩的度に影響を与える (つまり解釈多様性と概念的適切性は影響しない) という違いも示されている。このことは、理解容易な隠喩と理解容易でない隠喩では、詩的度認知の過程に何らかの違いがあることを示唆している。

Utsumi & Kuwabara (2005) や Utsumi (2005a) は、上記の 3 要因のひとつである解釈多様性が隠喩と直喩の（選好度や理解容易度に関する）違いを説明する重要な要因でもあることを実験的に示している。特に、被喩辞・喩辞ペアの解釈多様性と隠喩・直喩間の理解容易度の差の間に以下の関係が成立することを明らかにした。

- 全体として、直喩のほうが隠喩よりも有意に理解容易である。
- 解釈多様性と隠喩・直喩間の理解容易度の差（隠喩の理解容易度から直喩の理解容易度を引いた値）の間には、有意な正の相関がある⁽¹⁾。
- 解釈多様性の高い被喩辞・喩辞ペアでは、隠喩・直喩間で理解容易度に有意差はない。
- 解釈多様性の低い被喩辞・喩辞ペアでは、直喩のほうが隠喩よりも有意に理解容易である。

さらに Utsumi (2005a) は、解釈多様性の高低による上記の違いは、隠喩と直喩の理解過程の違いに帰着できると論じた。表現形式と機能の関係 (Bowdle & Gentner, 2005) によれば、「XはYである」という形式の隠喩は、喩辞を代表事例とするカテゴリのメンバが被喩辞であることを表すカテゴリ化 (categorization) 過程 (Glucksberg, 2001, 2003) によって理解され、「XはYのようである」という形式の直喩は、被喩辞・喩辞間の比較 (comparison) 過程によって理解されると考えられる。そして被喩辞・喩辞ペアの解釈多様性が高いほど隠喩はカテゴリ化として理解されやすい（解釈が少数の顕現的な意味から構成される場合には、カテゴリ化として理解しにくい）のに対して、比較過程には解釈多様性の高低によるそのような違いは見られない。したがって、解釈多様性が高い場合には隠喩・直喩間で理解容易度の差がないが、解釈多様性が低い場合には直喩のほうが理解容易であると判断されるというわけである。なお、隠喩のカテゴリ化による理解のしやすさには、その隠喩の適切性 (Jones & Estes, 2005) や喩辞の持つ比喩的な意味の慣習性 (Bowdle & Gentner, 2005; Gentner & Bowdle, 2001) が関係するという主張もなされている。

2.2 認知修辞学から予想される詩的度認知への要因

認知修辞学では、言語表現の表現技法、解釈、効果の 3 者間の相互関係を図 1 のように捉える。ここでは、詩的・審美的・情緒的効果の喚起は、鑑賞のための認知機構から直接生じるだけでなく、表現の意味作用や理解過程も大きく関わっていると考えられる。2.1 節で述べた隠喩の詩的度認知に影響を与える 3 要因のうち解釈多様

⁽¹⁾なお、解釈多様性と隠喩や直喩の理解容易度の間には有意な相関は見られなかった。あくまでも隠喩・直喩間の理解容易度の差との相関であることに注意されたい。

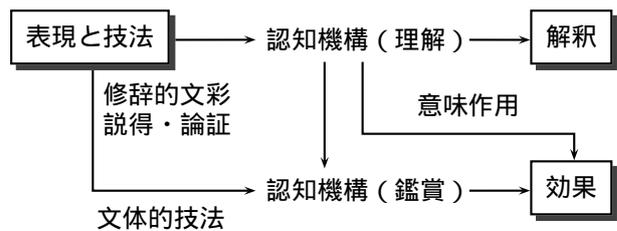


図 1: 認知修辞学の枠組

性と概念的適切性は、まさに隠喩の理解（意味）を通じて影響を与えている。（感情価については鑑賞の認知機構に関わる要因である。）

ここではさらに、図 1 から、詩的度に影響を与える要因として、「表現形式」と「理解過程」が考えられる。

4. 表現形式 — 比喩性が明示される（直喩）か明示されない（隠喩）の違いである。一般的に直喩形式のほうが文学テキストに多く出現することを考えると、直喩形式のほうが隠喩形式より詩的であると考えられる⁽²⁾。
5. 理解過程 — 2.1 節で述べたカテゴリ化過程と比較過程の違いである。直観的には、詩的・文学的な表現の観賞には概念間の比較が有効であるので、比較過程のほうがカテゴリ化過程よりも詩的であると仮定できる。これについては 3.2.4 で考察する。

2.3 隠喩・直喩間の詩的度認知に関する予測

2.1 節および 2.2 節から、隠喩と直喩の間の詩的度の差はこれら 5 要因から予測できると考えられる。ただし 2.1 節で述べた既存の知見は隠喩に対するものであるため、直喩についてもこれらの要因が詩的度に影響を及ぼすかどうかは明らかではない。そこで、ここではとりあえず、隠喩と直喩の比喩的意味の同一性から、直喩でも隠喩と同じ関係が成立すると仮定しておき、この仮定の妥当性については、実験結果から 3.2.4 節で議論する。

各要因での違いが詩的度にどのような影響を及ぼし、結果として隠喩と直喩のどちらが詩的に関する予測をまとめたのが表 1 である。各列には、その要因の隠喩・直喩間の異同による詩的度の違いが示されている。解釈多様性については、Utsumi & Kuwabara (2005) により隠喩・直喩間に違いがないことがすでに示されているが、感情価については、差があるかどうかは明らかではない。感情価の差については本研究の実験で調べるが、表 1 では隠喩・直喩間に差はないと仮定している。一方、理解容易度については 2.1 節で述べたような差が生じることが既知であるので、理解が容易でないほど詩的

⁽²⁾アリストテレスも「弁論術」の中で次のように述べている。「譬え（直喩）は散文においても役立つが、しかし、その使用は稀である。というのは、それは詩的表現に属すからである。」(アリストテレス, 1992, p.322)。

表 1: 各要因における隠喩・直喩間の詩的度の違いの予測

	解釈多様性	理解容易度	感情価	形式	理解過程	全体
解釈多様性・高	隠喩 = 直喩	隠喩 = 直喩	隠喩 = 直喩	隠喩 < 直喩	隠喩 < 直喩	隠喩 ≪ 直喩
解釈多様性・低	隠喩 = 直喩	隠喩 > 直喩	隠喩 = 直喩	隠喩 < 直喩	隠喩 = 直喩	隠喩 = 直喩
全体	隠喩 = 直喩	隠喩 > 直喩	隠喩 = 直喩	隠喩 < 直喩	隠喩 < 直喩	隠喩 < 直喩

各列における不等式は、その要因によって予測される隠喩・直喩間の詩的度の大小関係を示している。したがって、たとえば、解釈多様性が低い場合の理解容易度の欄の「隠喩 > 直喩」は、理解容易度という要因からは隠喩のほうが直喩よりも詩的度が高いことが予測されることを示しており、隠喩のほうが直喩よりも理解容易度が高いことを示しているわけではないことに注意されたい。

度が高いという関係から、解釈多様性の低いペアでは隠喩のほうが詩的度が高いが、解釈多様性の高いペアでは詩的度の差もないと予測できる。形式と理解過程については、2.2 節で述べた通りである。

もちろんこれらの 5 要因が等しく詩的度に影響を与えるかどうかは定かではないが、個々の要因による詩的度の違いを等しく考慮すると、「隠喩と直喩のどちらが詩的か」という問いに対して、以下の解答が予測できる（表 1 の「全体」の列に相当する。）

- 解釈多様性の高いペアでは、「形式」と「理解過程」の違いから、直喩のほうが隠喩よりも著しく詩的であると予測される。
- 解釈多様性の低いペアでは、「理解容易度」と「形式」が相反する予想をするため、総合的に考えると隠喩と直喩で詩的度に差はないと予測される。
- 被喩辞・喩辞ペア全体では、「理解容易度」と「形式」・「理解過程」が相反する予測をするが、直喩のほうが詩的とする要因のほうが多いため、結果として直喩のほうが隠喩よりも詩的であると予測される。

3 実験による検証

本実験は、すでに他で報告した実験（隠喩の理解と観賞過程に関する実験 (Utsumi, 2005b)、直喩の理解に関する実験 (Utsumi & Kuwabara, 2005; Utsumi, 2005a)）と、直喩に関する観賞実験の 4 つの実験で構成される。なお、これらの実験は基本的に質問紙法であるが、CGI を用いてウェブブラウザ上で実施した。

3.1 実験方法

3.1.1 参加者

全体で 206 名の日本女子大学の大学生（隠喩理解実験 80 名、隠喩観賞実験、直喩理解実験、直喩観賞実験各 42 名）が、コンピュータリテラシーの授業の課題と

して実験に参加した。

3.1.2 材料

4 組の日本語の被喩辞・喩辞ペアを 10 グループ、計 40 組の被喩辞・喩辞ペアを用いた。付録にすべての被喩辞、喩辞のリストを示す。各グループの 4 ペアは、喩辞に用いる 2 個の単語（例：「花束」「氷」）と被喩辞に用いる 2 個の単語（例：「香水」「星」）のすべての組み合わせ（例：「香水—花束」「香水—氷」「星—花束」「星—氷」）で構成した。実験では、これらのペアから「X は Y だ」形式の隠喩表現（例：「香水は花束だ」）や「X は Y のようだ」形式の直喩表現（「香水は花束のようだ」）を生成して用いた。

3.1.3 手続き

隠喩の理解実験 (Utsumi, 2005b) では、各参加者は各被喩辞・喩辞グループから 1 個の隠喩表現とその表現に含まれない単語 1 個（例：「香水は花束だ」と「星」の組み合わせ）、計 10 個の隠喩と 10 個の単語が割り当てられ、以下の課題をその順番で行った。

- 単語に対する特徴列挙課題：各単語の表す概念に典型的だと感じる特徴・属性を 3 個以上記述した。
- 隠喩の理解課題：以下の 3 課題をその順番で行った。
 - 特徴列挙課題：隠喩の意味を考えたとき、被喩辞（目標概念）に典型的だと思う 3 個以上の特徴を記述し、それらの典型度を 3 段階で評定した。
 - 自由記述課題：隠喩の意味を自由に記述した。
 - 理解容易度評定課題：隠喩の理解容易度を 7 段階（1：全く理解容易でない、4：どちらとも言いえない、7：とても理解容易である）で評定した。

隠喩の鑑賞実験 (Utsumi, 2005b) では、各参加者は被喩辞、喩辞ともに重複しない 20 個の隠喩を割り当てられ、各隠喩の詩的度（詩的・文学的な表現かどうか）の

表 2: 解釈多様性, 理解容易度, 美しさに関する隠喩・直喩間の違い

	解釈多様性			理解容易度			美しさ		
	隠喩	直喩	差	隠喩	直喩	差	隠喩	直喩	差
全てのペア / 平均による分類 ^(a)									
解釈多様性・高	3.24	3.30	-0.06	4.08	4.11	-0.03	4.33	4.44	-0.11
解釈多様性・低	2.75	2.83	-0.07	4.56	4.98	-0.42**	4.77	4.72	0.05
全体	3.01	3.08	-0.07	4.31	4.52	-0.22**	4.54	4.57	-0.03
全てのペア / トップ 10 による分類 ^(b)									
解釈多様性・高	3.37	3.35	0.02	3.84	3.91	-0.07	4.43	4.53	-0.10
解釈多様性・低	2.66	2.79	-0.13	4.42	4.87	-0.45**	4.94	4.85	0.08
理解容易なペア / トップ 10 による分類 ^(c)									
解釈多様性・高	3.24	3.27	-0.03	4.94	4.90	0.03	4.75	4.88	-0.14
解釈多様性・低	2.61	2.82	-0.22	4.65	5.05	-0.40**	4.81	4.66	0.16
全体	2.92	3.03	-0.11	4.94	5.08	-0.15†	4.82	4.77	0.05

(a) 40 個すべての被喩辞・喩辞ペアの解釈多様性の平均値以上のペアを解釈多様性・高 ($n=21$), 平均値未満のペアを解釈多様性・低 ($n=19$) と分類した場合.

(b) 40 個すべての被喩辞・喩辞ペアの中で, 解釈多様性の値の上位 10 ペアを解釈多様性・高, 下位 10 ペアを解釈多様性・低と分類した場合.

(c) 理解容易なペア (隠喩, 直喩ともに理解容易度が中点 4 以上のペア, $n=25$) の中で, 解釈多様性の値の上位 10 ペアを解釈多様性・高, 下位 10 ペアを解釈多様性・低と分類した場合.

† $p < .10$. * $p < .05$. ** $p < .01$.

7 段階 (1: 全く詩的でない, 4: どちらとも言えない, 7: とても詩的である) での評定を行った. さらに, 各隠喩に対して, 6 個の尺度 (自然さ, 美しさ, 形式度, 政治的発言での使用頻度, 趣味の良さ, 厳密さ) の 7 段階評定も行った.

直喩の理解実験 (Utsumi & Kuwabara, 2005) では, 各参加者は被喩辞, 喩辞ともに重複しない 20 個の直喩を割り当てられ, 隠喩理解実験で行った 3 課題 (特徴列挙課題, 自由記述課題, 理解容易度評定課題) と同じ課題を行った.

そして, 本研究で行った直喩の鑑賞実験では, 各参加者は被喩辞, 喩辞ともに重複しない 20 個の直喩を割り当てられ, 詩的度と美しさの 7 段階での評定を行った. なお, 2 章で述べた概念的適切性や感情価という要因は, 隠喩の鑑賞実験 (Utsumi, 2005b) で評定された 6 個の尺度および隠喩の解釈多様性の計 7 尺度から, 主成分分析により固有値が 1 以上となる主成分として抽出された (その他に非形式性と解釈多様性) ものである. そこで, 本研究では概念的適切性の代表値として隠喩・直喩の理解容易度の評定値, 感情価の代表値として美しさの評定値を用いた. 理解容易度は概念的適切性の主成分得点と相関が非常に高い ($r = .89, p < .0001$) ことか

ら, 代表値として適切である. また美しさは感情価を表す主成分において因子負荷量の最も大きい変数である.

3.2 結果と考察

実験結果を示す前に, 解釈多様性の算出方法についてふれておく. 隠喩表現および直喩表現の解釈多様性は, 理解実験の特徴列挙課題の結果を用いて, 以下の方法で算出する.

1. 各隠喩または直喩に対して特徴列挙課題で挙げられた特徴 (の表現) について, 定められた基準 (分類語彙表における最も細かい分類が同じである, 語幹が同じ表現である等) のいずれかを満たす複数の特徴を一つの特徴とみなす. 例えば「欠かせない」と「必要不可欠である」は同じ特徴を表すとみなされる.
2. 上記の処理を行った後に, 一人の参加者だけが挙げた特徴はすべて解析対象から除外し, 各隠喩 (直喩) の特徴リストを生成する.
3. 各隠喩 (直喩) X に対して, 式 (1) を用いて解釈多様性 $H(X)$ を計算する.

$$H(X) = - \sum_{i=1}^N p(x_i) \log_2 p(x_i) \quad (1)$$

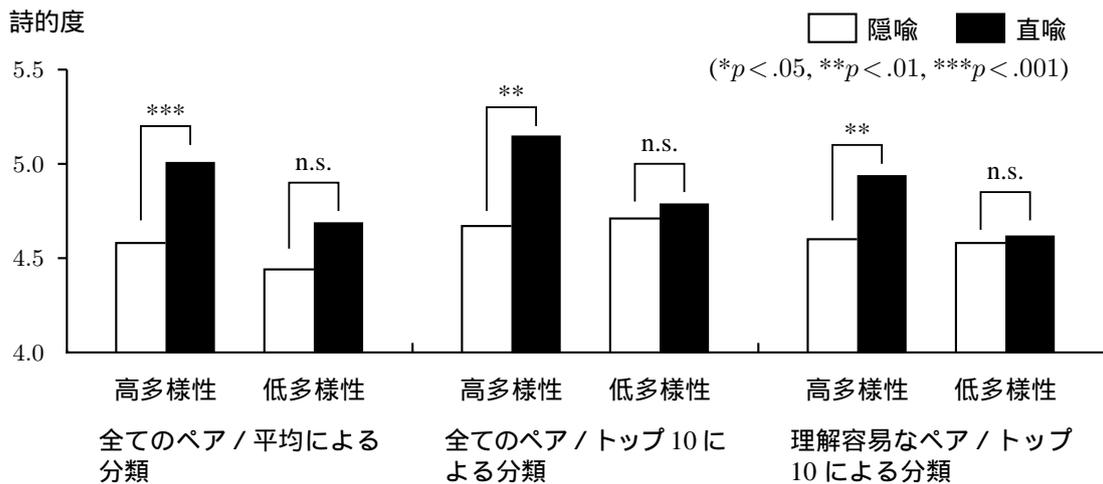


図 2: 解釈多様性の高いペアと低いペアにおける隠喩と直喩の詩的度の違い

$$p(x_i) = \frac{\text{特徴 } x_i \text{ の記述数}}{\text{隠喩 } X \text{ の特徴リストの総記述数}} \quad (2)$$

なお、自由記述課題の結果からも同様に解釈多様性の値を算出することができる。ただし自由記述課題の場合には、上記の処理を行う前に、各文をできるだけ小さい語句に分解して、喩辞、被喩辞、機能語などを取り除いておく必要がある。さらに被喩辞・喩辞ペア自体の解釈多様性は、対応する隠喩と直喩で列挙された特徴を併合したリストに対して上記の処理を行った結果として算出される値とする。以上の解釈多様性の算出方法の詳細については、文献 (Utsumi, 2005b; Utsumi & Kuwabara, 2005) を参照されたい。

3.2.1 隠喩・直喩間の各要因の違い

まずは、隠喩の詩的度に影響を与える解釈多様性、理解容易度、美しさの各要因について、隠喩と直喩の間どのような違いが見られるかを調べた。表 2 にそれらの結果をまとめたものを示す。

この表から、解釈多様性および美しさについては、隠喩と直喩の間で特に有意な差は見られないことがわかる。特に、隠喩・直喩間で美しさ (感情価) に違いはないという 2.3 節の仮定の妥当性が確認されたことになる。よって、隠喩と直喩の詩的度に差が生じるとしても、この 2 要因はその違いを決定づける大きな要因ではないことになる⁽³⁾。一方、理解容易度については、2.1 節で述べた知見と同じ差が生じている。

3.2.2 隠喩・直喩間の詩的度の違い

次に本研究の目的である隠喩と直喩の詩的度の違いを調べた。隠喩と直喩の詩的度の平均評定値を比較すると、40 個の隠喩の詩的度の平均評定値 4.51 よりも、

40 個の直喩の平均評定値 4.86 のほうが有意に高かった ($t(39) = 4.65, p < .0001$)。よって、全体として直喩のほうが隠喩よりも詩的であることがわかった。この結果は表 1 の予測と一致する。

次に、図 2 に、解釈多様性の高いまたは低い被喩辞・喩辞ペアの隠喩・直喩間の詩的度の違いを示す。この図から明らかなように、解釈多様性の高い/低いペアをどのように選んだとしても、2.3 節で示した予測と完全に一致する以下の結果が得られた。

- 解釈多様性の高いペアでは、直喩のほうが隠喩よりも詩的度 (の平均評定値) が有意に高かった。
- 解釈多様性の低いペアでは、直喩のほうが隠喩よりも詩的度の平均評定値が高い傾向にあるものの、統計的な有意差は得られなかった。

詩的度評定に関する以上の結果は、隠喩と直喩の違いに関する新たな知見を与えるものであり、さらに、予測と結果の一致は、認知修辞学による詩的效果の喚起モデルの枠組の心理学的妥当性を示すものである。

3.2.3 詩的度の差の重回帰分析

隠喩・直喩間の詩的度の差が解釈多様性、理解容易度、美しさの各要因の差から説明できるかどうかを見るために、詩的度の差を従属変数、解釈多様性の差、理解容易度の差、美しさの差を独立変数とする重回帰分析を行った。表 3 にその結果を示す。なお、すべての変数について、隠喩の値から直喩の値を引いた値を差として用いた。なお、理解困難な (理解容易でない) ペアに関しては、この 3 要因から詩的度の差をほとんど予測できなかった ($R^2 = .075$)。

表 3 を見ると、解析対象を全ペアにするか理解容易なペアにするかに関係なく、理解容易度の差 (隠喩が直喩よりも理解しやすいほど、直喩が隠喩よりも詩的にな

⁽³⁾しかし、これらの要因についての隠喩・直喩間の有意でないわずかな差が詩的度の差に影響を及ぼす可能性はある。これについては 3.2.3 節で考察する。

表 3: 隠喩・直喩間の詩的度の差を従属変数とする重回帰分析の標準化偏回帰係数と相関

	解釈多様性の差		理解容易度の差		美しさの差	
	相関	回帰	相関	回帰	相関	回帰
全ペア ^(a)	-.17	-.16	-.27†	-.42**	.51***	.58***
理解容易なペア ^(b)	-.25	-.10	-.62***	-.55***	.55**	.45**

(a) $R^2 = .44$, $F(3, 36) = 9.31$, $p < .001$. (b) $R^2 = .61$, $F(3, 21) = 11.12$, $p < .001$.

† $p < .10$. * $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$

表 4: 直喩と隠喩の詩的度と各要因との相関係数

	直喩			隠喩		
	全て	理解容易 ^(a)	理解困難	全て	理解容易 ^(b)	理解困難
解釈多様性						
列挙課題	.03	-.12	-.16	.13	.49*	-.20
記述課題	.30†	.41†	.41†	.34*	.46*	.16
理解容易度	-.47**	-.47*	.18	-.44**	-.57**	.12
美しさ	.57***	.72***	.76***	.37*	.40†	.73***

(a) 直喩の理解容易度の全体の平均値 4.52 以上の直喩 ($n = 20$) を理解容易であるとした。

(b) 隠喩の理解容易度の全体の平均値 4.31 以上の直喩 ($n = 19$) を理解容易であるとした。

† $p < .10$. * $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$

る)と美しさの差(隠喩が直喩よりも美しいほど、隠喩が直喩よりも詩的になる)の2要因が詩的度の差を説明するために重要な変数であることがわかる。特に美しさについては、ペア全体や解釈多様性の高いペア/低いペアにおける隠喩・直喩間に顕著な差は見られないが、個々のペアにおける美しさの差が詩的度の差を説明するのに有効であると言える。

3.2.4 直喩の詩的度に影響を与える要因

2.3 節では、Utsumi (2005b) が示した隠喩の詩的度と3要因(解釈多様性、概念的適切性、感情価)の関係が、直喩においても同様に成立すると仮定した。この仮定に基づいた表1の予測がおおむね心理学的に妥当であることは3.2.2 節で示したが、ここでこの仮定の妥当性を検証しておくことも重要であろう。

そこで、直喩の詩的度と解釈多様性、理解容易度(概念的適切性の代表値)、美しさ(感情価の代表値)の相関を求めた。その結果を隠喩の結果とともに表4に示す。さらに、詩的度を従属変数、解釈多様性、理解容易度、美しさを独立変数とする重回帰分析の結果を表5および表6に示す。

これらの結果から、直喩の場合と隠喩の場合でほとんど同じ傾向が見られるが、以下の2点が隠喩と直喩で大きく異なっていることがわかる。

- 2.1 節でも述べたように、理解容易な隠喩の詩的度は美しさによる影響をあまり受けない(主に理解容易度の影響を受ける)のに対して、理解容易な直喩の詩的度は美しさから最も大きな影響を受ける。
- 全体的に、隠喩の詩的度に比べて直喩の詩的度は解釈多様性に依存しない。

以上をまとめると、隠喩の詩的度は理解容易かどうかによって異なる要因が関与するが、直喩の詩的度は理解容易かどうかに関わらず美しさの影響を与えることになる。

この違いを説明する一つの仮説として、2.1 節で既存の知見として述べた「隠喩と直喩の理解過程の違い」と、「美しさの詩的度への影響」の関係を考えることができる。より具体的には、被喩辞・喩辞間の比較による理解では、表現の美しさの認知が行われ、それが鑑賞(詩的度の認知)過程に影響を与えるのに対して、被喩辞のカテゴリ化による理解では美しさの認知が行われず(もしくは一貫して美しさが低いと判断され)、よって美しさが鑑賞過程に影響しないという仮説である。隠喩はカテゴリ化によって理解されるが、あまり多様な意味が得られない場合(つまり解釈多様性が低い場合)(Utsumi & Kuwabara, 2005) または喩辞の比喩的な意味の慣習度

表 5: 詩的度を従属変数とする重回帰分析の標準化偏回帰係数 (列挙課題の場合)

	直喩			隠喩		
	全て (a)	理解容易 (b)	理解困難 (c)	全て (d)	理解容易 (e)	理解困難 (f)
解釈多様性	-.16	-.09	-.25	.11	.23	.04
理解容易度	-.67***	-.43**	-.22	-.66***	-.52*	-.22
美しさ	.71***	.68***	.87***	.61***	.36†	.83***

(a) $R^2 = .71$, $F(3, 36) = 29.66$, $p < .001$. (b) $R^2 = .71$, $F(3, 16) = 12.96$, $p < .001$.

(c) $R^2 = .66$, $F(3, 16) = 10.44$, $p < .001$. (d) $R^2 = .53$, $F(3, 36) = 13.49$, $p < .001$.

(e) $R^2 = .55$, $F(3, 15) = 6.24$, $p < .01$. (f) $R^2 = .57$, $F(3, 17) = 7.53$, $p = .002$.

† $p < .10$. * $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$

表 6: 詩的度を従属変数とする重回帰分析の標準化偏回帰係数 (記述課題の場合)

	直喩			隠喩		
	全て (a)	理解容易 (b)	理解困難 (c)	全て (d)	理解容易 (e)	理解困難 (f)
解釈多様性	.16	.28†	.15	.24*	.35*	.05
理解容易度	-.63***	-.50**	-.18	-.63***	-.54**	-.21
美しさ	.64***	.57***	.78***	.57***	.39*	.81***

(a) $R^2 = .71$, $F(3, 36) = 29.47$, $p < .001$. (b) $R^2 = .76$, $F(3, 16) = 16.84$, $p < .001$.

(c) $R^2 = .62$, $F(3, 16) = 8.69$, $p < .001$. (d) $R^2 = .57$, $F(3, 36) = 16.16$, $p < .001$.

(e) $R^2 = .63$, $F(3, 15) = 8.50$, $p = .002$. (f) $R^2 = .57$, $F(3, 17) = 7.58$, $p = .002$.

† $p < .10$. * $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$

が低い場合 (Bowdle & Gentner, 2005) には、カテゴリ化としての理解が困難になるため概念間の比較としての再理解が行われる。したがって、理解容易な隠喩ではカテゴリ化過程による理解が行われており、その結果、詩的度が美しさに影響を受けないのに対して、理解困難な隠喩は比較過程による理解が行われるので、詩的度の判断が美しさに依存することになる。一方、直喩は解釈多様性や喩辞の慣習度に関係なく比較過程によって理解されるので、理解容易 / 困難のいずれの場合も、詩的度の判断が美しさに依存することになるのである。もしこの仮説が正しいとすると、比較過程のほうがカテゴリ化過程よりも詩的であるという表 1 の予測 (「理解過程」の列) の裏付けにもなる。

以上の仮説はあくまでも思索の域を越えないが、表 2 における美しさの隠喩・直喩間の違いのデータとも整合する。統計的な有意差は得られなかったが、概して、解釈多様性の高いペアでは直喩のほうが美しさが高いのに対して、解釈多様性の低いペアではほぼ同じである。この傾向は、前述したように、解釈多様性の高いペアでは直喩のみが比較により理解されるので、直喩のほうが美しさが認知されやすいのに対して、解釈多様性の低い

ペアでは直喩、隠喩のどちらも比較によって理解されるので、美しさの評定に差がないということで説明可能である。

4 おわりに

本研究を通じて、隠喩と直喩の詩的度認知に関して、以下のことが明らかになった。

- 同じ被喩辞と喩辞の組み合わせでも、隠喩と直喩という形式の違いにより、詩的度の差が生じた。解釈多様性が高い被喩辞・喩辞ペアでは、直喩のほうが隠喩よりも詩的であると判断されるのに対して、解釈多様性の低いペアでは、明確な差がなかった。全体としては、直喩のほうが隠喩よりも詩的であると認知された。
- これらの実験結果は、既存の知見および認知修辞学に基づく予測とほぼ一致した。予測によると、解釈多様性の高低による詩的度の差の違いは、主に理解容易度と理解過程の違いによって説明できる。
- 理解容易な隠喩の詩的度は美しさの影響を受けないのに対して、理解容易な直喩の詩的度は美しさ

の影響を受けた。理解容易な隠喩と直喩では理解過程が異なる（カテゴリ化過程と比較過程）ことを考え合わせると、比較過程では美しさの認知が行われるのに対し、カテゴリ化過程では美しさの認知が行われないという仮説を導くことができる。表現の美しさ、美的感覚は詩的・審美的効果の喚起過程を考える上で重要であるので、認知修辞学にとって大変に重要な仮説である。

今後は、他のさまざまな形式の隠喩・直喩の詩的度認知の探求、理解過程と美の認知に関する仮説の検証などを通じて、詩的效果の喚起過程の解明や認知修辞学の拡張を行っていきたい。

参考文献

- アリストテレス (1992). 弁論術. 岩波書店. 戸塚 七郎 (訳).
- Bowlde, B. & Gentner, D. (2005). The career of metaphor. *Psychological Review*, 112(1), 193–216.
- Chiappe, D. & Kennedy, J. (2001). Literal bases for metaphor and simile. *Metaphor and Symbol*, 16(3&4), 249–276.
- Gentner, D. & Bowlde, B. (2001). Convention, form, and figurative language processing. *Metaphor and Symbol*, 16(3&4), 223–247.
- Glucksberg, S. (2001). *Understanding Figurative Language: From Metaphors to Idioms*. Oxford University Press.
- Glucksberg, S. (2003). The psycholinguistics of metaphor. *Trends in Cognitive Sciences*, 7(2), 92–96.
- Johnson, A. (1996). Comprehension of metaphors and similes: A reaction time study. *Metaphor and Symbolic Activity*, 11(2), 145–159.
- Jones, L. & Estes, Z. (2005). Metaphor comprehension as attributive categorization. *Journal of Memory and Language*, 53, 110–124.
- 楠見 孝 (2005). 心理学と文体論 比喩の修辞効果の認知. 中村 明, 野村 雅昭, 佐久間 まゆみ, 小宮 千鶴子 (編), 表現と文体, pp. 491–501. 明治書院.
- Utsumi, A. (2002). Toward a cognitive model of poetic effects in figurative language. In *Proceedings of 2002 IEEE International Conference on Systems, Man and Cybernetics*. WP1M2.
- 内海 彰 (2004). 認知修辞学の構想. 人工知能学会第 18 回全国大会論文集.

- Utsumi, A. (2005a). Interpretive diversity explains metaphor-simile distinction. submitted for publication.
- Utsumi, A. (2005b). The role of feature emergence in metaphor appreciation. *Metaphor and Symbol*, 20(3), 151–172.
- Utsumi, A. & Kuwabara, Y. (2005). Interpretive diversity as a source of metaphor-simile distinction. In *Proceedings of the 27th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, pp. 2230–2235.
- Zharikov, S. & Gentner, D. (2002). Why do metaphors seem deeper than similes?. In *Proceedings of the 24th Annual Conference of the Cognitive Science Society*, pp. 976–981.

付録：実験に用いた被喩辞・喩辞ペア

被喩辞	喩辞
人生	旅
愛	ゲーム
怒り	海
眠り	嵐
香水	花束
星	氷
空	鏡
眼	湖
恋人	太陽
希望	虹
子供	水
言葉	宝石
老人	人形
声	枯れ木
性格	火
結婚	石
死	夜
不安	霧
時間	お金
思い出	矢